

水が語るもの



川シリーズ THE RIVER 行基の 水資源開発事業

水ものがたり

世界の川と水インフラ(3) -チャオプラヤ川-

近畿の水名橋 第7回

世界の水 水辺空間を生かした都市再生の事例
-ヨーロッパ(その5)-

水と文学 歴史の街を縫って流れる木津川

昭和28年9月台風13号による淀川の大水害(I)

うおーたーなっと

水都大阪と幻の大阪万国技館(9)

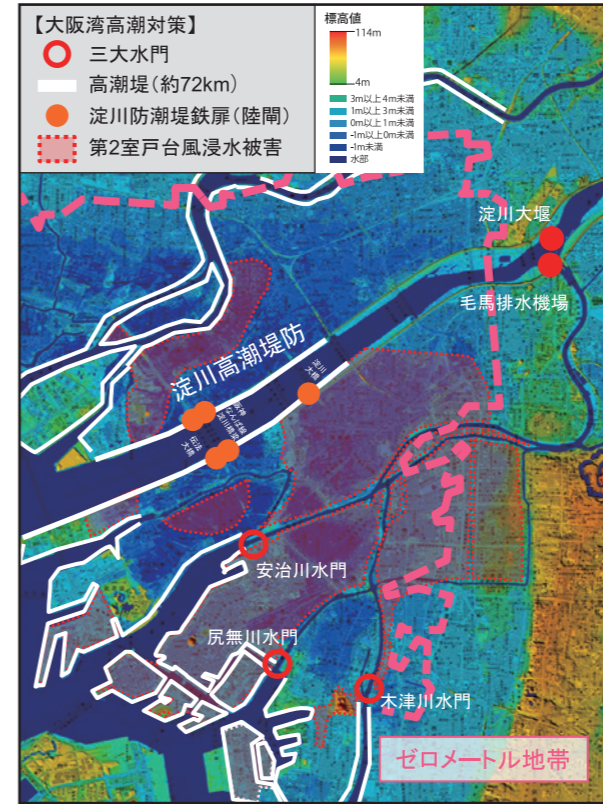


図1 大阪湾高潮対策

大阪湾高潮対策の概要と防御施設の操作

第二室戸台風を踏まえ、伊勢湾台風が大阪に最も危険なコースをとったケースで発生する高潮から守るために対策が取られました。施設としては、三大水門(安治川、尻無川、木津川)(昭和45年完成)、毛馬排水機場(昭和58年改築)、淀川大堰(昭和58年完成)、大阪湾岸と淀川の高潮堤(昭和44年完成)、淀川陸間(昭和46年完成)が整備されています。三大水門で河口からの高潮を防ぎ、高潮堤で陸上への侵入を防ぎ、陸間ではどうしても架け替えができません。低いままの橋梁からの侵入を防ぎます。これらによって、TP4・7mから6・



中之島の景観と河岸利用

【資料提供】国土交通省 近畿地方整備局

平成30年9月4日に襲来した台風21号では、過去の第二室戸台風(昭和36年)(高潮高TP2・93m)を上回る高潮(3・29m)が発生しました。第二室戸台風では、大阪市内の西半分が全没するような浸水被害が発生しましたが、今回の被害は、湾岸地域を除き、大阪市街地のこれらの地域では被害がほとんど発生していません。なぜでしょうか。

第二室戸台風の被害を踏まえ整備された、高潮対策とそれらの施設の円滑な操作が功を奏したためです。

国土交通省と大阪府から効果について公表されていますので、これを基に紹介します。

トピックス TOPICS

平成30年台風21号の高潮に対する大阪湾高潮対策の効果 —なぜ被害がなかったのか—

第二室戸台風の被害

大阪市内の上町台地の西側のほとんどが水没し、床上浸水約61,000戸、床下60,000戸、被災者26万人、死者32人に上り、中之島では水深が1・5mにも達しています(図1)。その被害は、当時の新聞に「大阪湾を襲った高潮は、…堂島、土佐堀川の防潮堤を越えて両岸にあふれ、中之島一帯のビル街も広い範囲にわたって地下室、一階などが水浸しとなり、毎日新聞社は濁流がウズ巻いて流れた。」(毎日新聞、昭和36年9月16日夕刊)と書かれています。



図2 淀川大堰、毛馬排水機場、大阪府三大水門の操作

8mの高さで、城壁のように外側を囲われることとなります。こうすると、寝屋川からの洪水と市内の雨水の出口がなくなり、大川(旧淀川)が淀川(新淀川)から分岐する地点に毛馬排水機場を設置し、水門で閉鎖した時の洪水をポンプで、淀川に排水しています。

台風21号では、30分で約3mの急な水位上昇にも関わらず、これらの防御施設の操作が円滑に行われ被害を防止しました。

平常時の効果

対策の説明のように、防御地域の外周を高い堤防・水門などで囲う方式の対策ですので、その内側の河川には高い堤防や橋梁の高上げが必要なくなりました。もし、この方式でなければ、パリのセーヌ川に例えられる中之島の景観や河川沿いのオープンテラスや公園の利用も異なったものになったことでしょう。

本誌は、近畿の「道の駅」、一部の府県および公共施設などに配布しています。インターネット環境をお持ちの場合は、<http://www.kc-center.co.jp/suishitsu/> においても最新号とバックナンバーをご覧になれます。誠に申し訳ございませんが、バックナンバーの配布は行っておりませんので、ご了承ください。

水が語るもの

第17号 平成30年12月発行(年2回発行)

編集・発行
一般社団法人近畿建設協会 技術部
〒540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31 OMM 13F
TEL 06-6941-3413 FAX 06-6910-5953
URL <http://www.kyokai-kinki.or.jp>

協力
株式会社
近畿地域づくりセンター

「水が語るもの」はインターネットでもご覧になれます。
<http://www.kc-center.co.jp/suishitsu/>

水が語るもの 検索



水が語るもの

表紙写真

大阪府岸和田市
「久米田池」



目次

3

水ものがたり
世界の川と水インフラ(3) -チャオプラヤ川-

京都大学名誉教授 池淵周一
(公財)河川財団研究フェロー

6

川シリーズ
行基の水資源開発事業

11

近畿の水
名橋 -第7回-

14

世界の水
水辺空間を生かした都市再生の事例 -ヨーロッパ(その5)-

一般社団法人 近畿建設協会・技術顧問 中野 雅弘
元大阪産業大学教授

16

水と文学
歴史の餅を縫って流れる木津川

評論家・文化プロデューサー 河内 厚郎

20

昭和28年9月 台風13号による淀川の大水害(1)

工学博士 宮井 宏

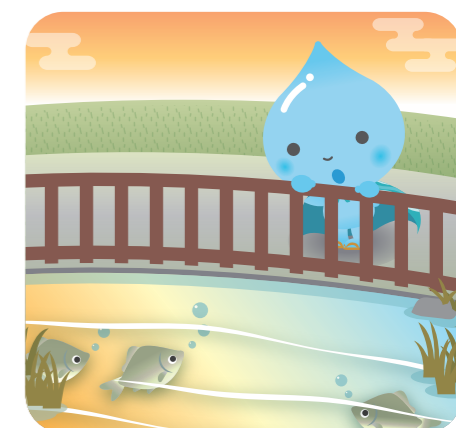
26

うおーたーねっと
水都大阪と幻の大阪大国技館(9)

水都の会 城北川プロジェクト代表 藤井 薫

28

トピックス
平成30年台風21号の高潮に対する大阪湾高潮対策の効果 -なぜ被害がなかったのか-



「由良川水害の歴史と防災対策」は、著者の都合により休載いたします。

水ものがたり

世界の川と水インフラ(3) -チャオプラヤ川-

京都大学名誉教授
(公財)河川財団研究フェロー
池淵周一



タイの首都、バンコク

写真 ナコンサワンで合流するピン川とナン川

タイは昔はシヤムと言われていた。英仏両勢力の緩衝地帯として独立を維持、植民地化されなかった。面積は513,120 km²、人口は6,718万人、首都はバンコクである。チャオプラヤの流域面積は16万km²、流路長は約1,100 km、流域内人口は2,680万人である。図にチャオプラヤ流域と本・支川、主要都市及びダム位置を示している。タイではピン川、ナン川が合流するナコンサワンから下流をチャオプラヤと

言っている。ピン川は標高1700mの北部山岳域を源流として658kmを流れてナコンサワンに、ナン川は同じく標高1,240mあたりを源流にして740km下ってナコンサワンに合流する。ナコンサワンの標高が25mで、ここからチャオプラヤ本川は372km流れて河口へ、最後はタイ湾に流入する。この間の河床勾配は5千分の1と緩勾配で、とりわけバンコクとその約100km上流のアユタヤの標高は2mしかない。このチャオプラヤ下

分けられる。降雨量は雨季に多く、乾季は少ない。年降雨量は全流域で1,140mm。流量も雨の季節変化を受けて、雨季に多く乾季に少ない変動をしている。年間総流量は370億トンと利根川の約4倍。古くは上流域を中心に豊かな森に覆われていたが、人口の増加が農地の拡大を求め、ゴム園やスズ採掘と合わせ森林伐採が進んだ。いまでは流域の多くが農地で、そのほとんどがチャオプラヤからの灌漑用水に依存している。とりわけチャイナートとアユタヤ間にはチャイナート・パサック水路と本川に囲まれた優良な灌漑水田地帯が広がっている。タイの農業は米作が中心で生産力も高く、稲の品種改良もなされ世界最大の米の輸出国になっている。農業の多角化も進められ、耕地を拡大し、トウモロコシ、キャッサバ、サトウキビ、天然ゴム、野菜など輸産物も増産している。



流域は地盤沈下もあって、広大な低平地を形成している。流域の大半はサバンナ気候帯に属し、年間を通して気温は高く、モンスーンの5月から10月が雨季、11月から4月の乾季に

メコンではトンレサップ湖という遊水地機能をもった広大な湛水域があつてアンコール文明を発展させたが、チャオプラヤにあつては河口から100kmほど上流部にチャオプラ

シア、マレーシア国に繋がっている。市内には高架鉄道や地下鉄が走り、高層ビルは様々な形で高さを競い合うかのよう林立している。中心部の車の渋滞はひどい。

栄華の都、アユタヤ

メコンではトンレサップ湖という遊水地機能をもった広大な湛水域があつてアンコール文明を発展させたが、チャオプラヤにあつては河口から100kmほど上流部にチャオプラ

ヤ、ロプリン、パーサククの三川に囲まれた地があり、そこにアユタヤ文明が栄えた。アユタヤは400年近く続いたアユタヤ大国の首都であった。隆盛を極めたこの地は、767年ビルマ民族によって陥落。廃墟跡地はユネスコ世界遺産になっている。その一角に仏頭がガジュマルの根の間に首をもたげた格好で残っている(写真1)。偶然にしる根の中に上下正しく埋まっている様子は仏さまが何かを訴えているように崇高である。



写真1 アユタヤのガジュマルの根の間に微笑む仏頭

農業国から工業国へと変貌したタイを襲った2011年の大洪水

タイは1980年代以降、急激な工業化を進め、ASEAN諸国の中でも高度成長をとげてきた国の一つである。2011年は5月から9月までの長い期間、断続的に、しかも広範囲に多くの雨が降り、上流のプーミボン、シリキット両ダムは早くから満水状況になり、洪水調節機能は十分に發揮できず、河川の流下能力を超える流量で溢水、場所によっては破堤・氾濫、大量の氾濫水が宅地、工業団地、広大な農地に流れ込んだ。氾濫水は下流バンコクにも達した。アユタヤ、バンコク間には500以上の日系企業が立ち並ぶ工業団地があり、工業団地では高さ2・5mの防水壁(50年確率洪水に対処)を越えて溢水、この地に生産の相当部分を依存していた企業にとってはサプライ・チェーンの寸断は大きく、タイ国はもとより世界経済にも影響をおよぼした。その後、工業団地の防水壁は嵩上げされ二重



写真3 工業団地の二重防水壁



写真4 支川合流付近の高床式住居

に張り巡らされ(写真3)、鉄道や道路もいたるところ盛土で嵩上げされた。タイの河川堤防は大部分が自然堤防であるが、河川の流下能力は洪水規模に比べるとそれほど大きくはない。バンコク、チェンマイ、ナコンサワなどの都市部や工業団地に限ってコンクリート直立壁や輪中堤で守られている。またタイは仏教国で沿川には仏教寺院や遺跡があり、その近傍も堤防で守られている。バンコク市内にあつては一部の支流を迂回させるとともに、前述の長大な輪中堤キングスダイク(王の堤防)が築かれている。今回の洪水をうけて、さらに洪水を海まで排水する分水運河が構想されている。なおピン川、ナン川に流入する支川合流付近は逆流で氾濫しやすく、高床式住居が多い(写真4)。

北のチェンマイ

バンコクから北に約900kmのピン川上流にチェンマイがある。人口は75万人、旧市街は城壁で囲まれており、その周りには堀が巡らされている。タイ北部の山岳域には少数民族が住んでおり、この辺りでも少数民族を見ることがある。このあたりになるとピン川の川幅は60mほどで市街地側はコンクリート護岸とコンクリート直立壁の堤防で守られているが、対岸は自然堤防で2011年洪水時にはこちらの新市街地は浸水被害が大きかった。

ピン川のプーミボンダム

ダム名はプーミボン国王の名である。1964年に完成したタイで最初のコンクリートダム(写真2)。堤高154m、総貯水量135億トン、灌漑、発電(総発電設備容量77・9万kw)が主目的で洪水調節も加わった多目的ダムで、洪水吐ゲートが堤体右岸にある。ダム下流には発電放流の変動を緩和する逆調節池がある。



写真2 プーミボンダム

中央に粘土遮水壁を設けたロックフィルダム。1972年に完成。堤高113・6m、総貯水量95・1億トンで、灌漑、発電(総発電設備容量50万kw)、洪水調節の多目的ダムで堤体右岸側に洪水吐がある。ダム下流一帯は国立公園が広がっている。

サワン。合流後の本川の川幅は300mほどである。ナコンサワンの市街地側は川に面して急勾配のコンクリート護岸とコンクリート直立壁で守られていたが、2011年洪水で氾濫浸水したため、直立壁が2mほど嵩上げされた。対岸は自然堤防で前面には植生や樹木が繁茂している。

この他にも、ナン川の支流に総貯水量7・6億トンのカエノイダムやパサク川に総貯水量9・6億トンのパサクダムがある。これまでダムは発電と灌漑を重視して運用されてきたが、大雨時の洪水制御にこれらのダムがどのように効果的に運用できるか統合管理が問われているようである。

合流する直前のナン川の左岸にタイで最大のレイク湿地帯があり、そこにブン・ボラペットという巨大なため池がある。水深は浅いが、面積は224km²と広大。農地灌漑がメインで、漁場としての機能もある。ハスも広く栽培されており、水質は悪い。池の最下流に堰堤があり、水門もある。そこから排水される。その他、ワン川沿いのクワン・ファヤオ湖(水面積約24km²の人造湖)をはじめ流域には広大なため池がいくつもあり、いずれも農地灌漑、漁業が営まれている。

ナコンサワンの堤防補強と巨大なため池、ブン・ボラペット湖

ナコン川とピン川が合流するナコン

地点には川幅300mにわたってチャオプラヤダムとも呼ばれている大堰があり、灌漑取水と洪水管理にあたっている。右岸側には閘門も設けられている。

写真7 アユタヤのチャオプラヤ、1台のタグボートが4台の大型荷役船を曳航。干切れたホテイアオイも流れている。

赤い花、火炎樹と赤濁色の川の水、ちぎれたホテイアオイの流れ

火炎樹は乾季が終わり、雨季が始まることを告げる指標植物であるが、プーミボン国王も好んだといわれており、河畔や遺跡、道路や住宅までどこでもこの赤い花が咲き誇っている(写真5)。景観のアクセントになっている。一方では、チャオプラヤの川の水の色は赤濁色に染まっている。上流に広がる林地はラテライト系土壌に覆われており、雨に打たれるとそれが流れ出し、赤濁色を呈する(写真6)。中流、下流に行くにつれて、その赤濁色は薄まるが、赤色に染まった水の色には変わりない。ホテイアオイを中心とした浮遊植物が河川の水辺やたまり、湖沼やため池、道路沿いの水たまりに繁茂



写真5 火炎樹



写真6 チェンマイのチャオプラヤと赤濁色の流れ



写真7 アユタヤのチャオプラヤ、1台のタグボートが4台の大型荷役船を曳航。干切れたホテイアオイも流れている。

参考文献 森下郁子・池淵周一・森下依理子・森下雅子 共著 世界の川シリーズ8『メコンとメナム・チャオプラヤに行く』遊タイム出版 2016年

行基の水資源開発事業

行基（668年から749年）は、東大寺の大仏造営や、多くの寺院の建立に関わった奈良時代の僧で、今年が生誕1350年に当たります。その功績は寺院の建立に留まらず、溜池や橋などの当時のインフラ事業に関わっています。これらは、畿内一円に及び1174（安元元）年に成立した「行基年譜」中の「天平十三年記」（以下年記）

灌漑用溜池

これらは、いずれも、河川から高い位置にある灌漑用水の確保が困難な洪積平野の開拓のために、洪積平野上に構築されたものです。現在も継続して機能を有している溜池を紹介します。

によると、「宗橋（橋梁）」6か所、「直道（道路）」1か所、「池（溜池）」15か所、「池溝（用水路）」6か所、「樋（堤防と樋門）」3か所、「堀（放水路）」4か所、「船息（港）」2か所などに及んでいます。行基の事業は、「困窮した人々の生活を救うための事業をした」（利他行）という行基の意思に共鳴した多くの有婆塞と呼ばれた民間人（行基集団）によって行われました。現代に至るまで各地で「行基さん」と親しまれている由縁です。今号の川シリーズでは、行基による水関連事業の内、今日まで残っているものや、その事跡が分かるものを土木事業の専門家による「行基と長屋王の時代（尾田栄章著）」に沿って紹介します。



凡例

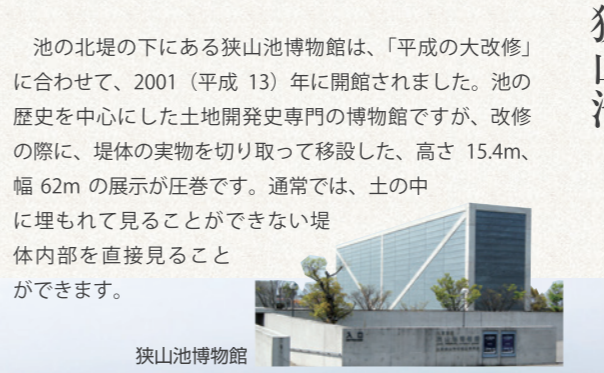
- 宗橋 6か所
- 直道 1か所
- 池 15か所
- 池溝 6か所
- 樋 3か所
- 堀 4か所
- 船息 2か所

※塗りつぶしはここで取り上げたもの



久米田池

大阪府岸和田市にあり、725（神亀2）年から738（天平10）年に構築されたとされています。現在の久米田池は、高さ約9mの高盛土の土堤に囲まれ、満水面積45.6ha、貯水量157万トン、灌漑面積27.7haで、大阪府内第一の溜池面積を有します。「年記」中の「久米多（田）池溝」は、池の地点では低い場所にある水量の豊富な牛滝川からの池へ水を引くために上流から導水するために築造された用水路と考えられています。



狭山池

狭山池は、大阪狭山市に位置し、平成の大改修に伴う発掘調査で、行基以前の616（推古24）年に築造されたことが分かっています。日本最古のダム形式の溜池です。この池は、行基集団が実施した15か所の溜池の構築の中でも、唯一の改築事業です。池の長い歴史の中で、何回かの池の堤体の嵩上げが行われ、「年記」によると、行基集団は、731（天平3）年に狭山池の改修を開始したと記されています。現在では、2002（平成14）年に完成した、「平成の大改修」と呼ばれている大和川の支川の西除川と東除川の治水対策の一環として、池の底を平均3mほど掘り下げ、堤体を約1.1m嵩上げされ、農業用水の容量180万トンに治水容量100万トンを加えたダム高18.5mの多目的ダムとして働いています。



猪名野開発

行基集団は、伊丹市の丘陵部である猪名野の開発に730（天平2）年頃から取り掛かります。ここでは、養う者のない孤児（弧）と老人（獨）を救済するための「給孤獨園」の経済基盤のために、水源の確保を手始めに数々の施設整備を進めて約150町歩（150ha）の開墾を達成しました。「溜池」（昆陽上池、昆陽下池、長江池）、「池溝」（昆陽上池溝、昆陽下池溝、長江池溝）が造られました。「池溝」は、いずれも上流部の河川から溜池に水を運ぶための導水路として機能したと考えられています。



猪名野開発と昆陽池

現在も昆陽上池の形を留めるものが昆陽池です。行基の時代から昭和初期までの千数百年間はほぼその形を留め、かつては約50haの大きさを誇っていました。しかし、伊丹市の人口増に伴う耕地の減少により、昭和年代に縮小され、現在は17haになりましたが、野鳥公園として整備され、憩いの場として多くの市民に親しまれています。池の中央にある日本列島を象った島は近くの伊丹空港を離発着する飛行機からの眺めで有名です。



淀川中下流部の開発事業

行基集団は、現在の枚方から下流の淀川中下流部左岸の開発事業に取り掛かります。730（天平2）年頃と推定されます。当時、この地域は、一面の沼地で、淀川は河本かの派川に分かれて流れていました。この地域の開発に必要なことは、溜池構築の用水事業ではなく、耕地への洪水の侵入を防ぐための堤防と淀川の流れをスムーズにし河川の水位を下げる放水路を組み合わせた総合的な治水対策です。このため、堤防として、茨田堤樋、高瀬堤樋、韓室堤樋、放水路として、比売嶋堀川、白鷺嶋堀川、次田堀川、大庭堀川などが主に構築されました。

これらの事業の後、淀川中下流域は、洪水との戦いの長い歴史が積み重ねられ、明治時代の近代的な治水事業によって、15年をかけて、1910（明治43）年に淀川改良工事が完成し、9.8kmの放水路である新淀川（現淀川本川）が開削されました。この後は、1917（大正6）年の淀川右岸の堤防決壊（大塚切れ）以外は、大きな被害から守られ、新淀川が古代からの治水事業の一つの到達点といえます。



山崎橋

行基集団が最初に取り組んだ橋です。725（神亀2）年の久修園院の起工が架橋の開始です。架橋地点は、宇治川、木津川、桂川が合流したすぐ下流の淀川です。1つの橋で対岸に渡れる地点で、また、狭窄部にあるため川幅が狭く流路が固定され架橋に最良ですが、流れが速くて深いため流されては架けることの繰り返しが生じていたと推定されます。731（天平3）年には対岸の右岸に山崎院を建てて再びこの橋に取り組んでいます。その後も、何回も流され、安土桃山時代に一時復活されましたが、その後は橋が架かっていません。

直道と清滝街道

「年記」の中の唯一の道路事業が、733（天平5）年の「直道」です。この道の現在の位置について諸説ありますが、淀川を渡っていた高瀬大橋の左岸から東に向かって清滝街道に繋がっていたとの説が有力です。このルートをとると、ここから木津に至り泉大橋に繋がり山陽地方からの物資の輸送の短絡路を形成することになり、当時の調や庸の運搬の労力の軽減につながります。清滝街道は別称「行基みち」とも呼ばれていますが、現在ここに国土交通省により地域高規格道路「清滝生駒道路」建設中です。現代の技術で設計された道路が、「行基みち」に沿っていることから当時の技術力の高さが推し量れます。

泉大橋

現在は、国道24号が淀川の支川の木津川を渡る場所に架けられた鋼鉄製の橋になっています。760（天平12）年に架設が始まりました。恭仁京への遷都が天平12年ですが、平城京から恭仁京に向かうためには木津川（当時は泉川）を渡らねばならず、恭仁京への遷都には必須の橋でした。橋の工事で管理のために泉橋院（現在は泉橋寺）が設置されました。



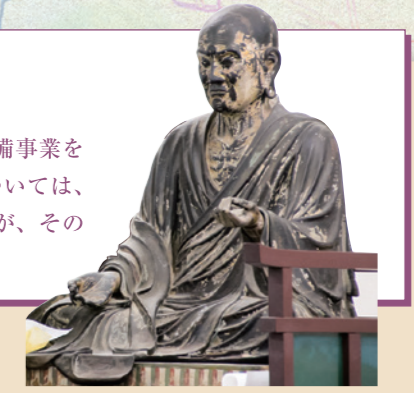
橋の架設・泉大橋と山崎橋

「年記」に6箇所の橋が行基集団によって架けたと記されていますが、すべて淀川流域にあり、大河川と道路が交差するところにあります。これらは、いずれも当時の人々の交通を楽にするために行基集団の開発事業の実施のために架橋されたとされています。2つの橋を紹介します。



行基菩薩の足跡

行基は、多くの寺院の設立に関わるとともに、当時の人々のために多くの社会基盤整備事業を実施しました。行基がどのような考えで、また、どのような組織で事業を実施したかについては、現代の我々も学ぶことが多いと思われます。それを知ることは難しいことではありますが、その一端に触れるために行基の足跡を、関係した寺院等を中心に追ってみたいと思います。



喜光寺の行基菩薩像

行基は、749（天平 21）年に没されていますが、朝廷の公式記録である「続日本紀」は、その時に業績について次のように、最大限の賞賛を示しています。その一部を、「天平の僧 行基（千田 稔著）」から引用します。
「僧侶や俗人で教化を慕ってしがう者は、ややもすれば千人に達することもあった。和尚の来ることを聞けば、巷に人がいなくなるほどに争ってやってきて、礼拝をした。それらの人々の器量にしたがって導き、みなを善に向かわせた。またみずから弟子たちを率いて、いろいろな要害のところに橋をつくり、堤を築いた。その評判を聞いて、多くの人々がやってきて、労働を提供したので、またたく間に工事は完成した。人民は今に至るまで、その恩恵をこうむっている。」

元興寺（旧法興寺）



法興寺は、行基が 682（天武 11）年に 15 歳で、飛鳥の大官大寺で出家した後に、修行を積んだ元興寺の前身で飛鳥にあった寺です。718（養老 2）年に、平城遷都とともに平城京内に新築移転され、元興寺になりました。行基は、この時代に、唐から帰国した僧の道昭に影響を受けたと言われてしています。道昭は、唐で玄奘三蔵を師とした僧で、行基は、道昭から「利他行」の思想や、唐の最先端の医学・薬学を学んだと考えられています。

喜光寺（菅原寺）



奈良市のかつての平城京の右京に 721（養老 3）年に建立されました。平城宮に近い位置に薬師寺などの他の大寺に相当する寺領を持ち、行基の布教や社会事業の拠点として 749（天平 21）年に 82 歳で没されるまで活動していました。建立時には、地名に因み菅原寺でしたが、748（天平 20）年に、聖武天皇によって喜光寺と命名されました。明治の廃仏毀釈により、廃寺寸前でしたが、平成になり現在の形に復興されています。

家原寺



行基の生家に 704（慶雲元）年に建立されました。行基が最初に建立した寺院です。現在は、周辺が都市化した堺市西区にあります。行基の父母は、いずれも渡来系の氏族で、この地域は渡来系の人々に所縁の深いところで、行基の事業の実施には、これらの人々の大いなる協力があったと思われる。地元では「智恵の文殊さん」として親しまれています。

大野寺と土塔



堺市中区の名も土塔町にあります。大野寺は、727（神龜 4）年に建立された、大野寺と同尼院が前身です。土塔は、十三重の高さ約 8.6m の大野寺の仏塔として造られたものです。現在は、発掘調査の後に復元されていますが、発掘調査時に人名などを刻んだ瓦が 1,000 枚以上発見されました。これらは、身分や男女を問わず、建立に協力した多くの人々（知識）を表したものです。行基が、広く一般民衆から慕われていたことの現れです。この当時、行基は菅原寺（喜光寺）にいました。大野寺は、多くの溜池が造られた和泉地方の本拠であり、そのランドマークとして土塔が構築されたと言われています。



飛火野



「行基さん大感謝祭」の参加者

「続日本紀」の 730（天平 2）年に「近京左側山原、聚集多人、妖言惑衆」と書かれています。これが飛火野での行基集団の活動と考えられ、行基が朝廷から弾圧を受けた要因と考えられています。しかし、その後、これまでの功績が認められ「小僧行基」との罵りから変わって、大僧正の位を与えられることになりました。行基の生誕 1350 年後の 2018（平成 30）年 10 月に、飛火野の活動に因んだ、「行基さん大感謝祭—妖言衆を惑わす—」が開催され 3,500 人が集合しました。



久米田寺



「行基参り」のための参拝に向かうだんじり

久米田寺は、734（天平 6）年に、久米田池の構築と管理のために建立された澄（隆）池院が前身とされています。地元では、「行基は、14 年の歳月をかけ、久米田池を完成し、水不足に悩む農民を救いました。」と言い伝えられ、毎年 10 月に開催される「八木だんじり祭」では、現在も灌漑の恩恵を受けている地元の 13 町のだんじりが久米田寺の行基開山堂に集合する「行基参り」でフィナーレが飾られます。

東大寺



大仏造営の詔が、743（天平 15）年に、紫香楽宮（現甲賀市）に造ることを予定して発布され、この頃から行基は弟子らを率いて大仏建立のための勧進を行って来ました。大仏は、最終的には、奈良市の若草山の橿野の現在の東大寺に、行基の死後の 752（天平勝宝 4）年に完成の開眼供養が行われました。東大寺では、造営の功を讃え、良弁、聖武天皇、菩提僊那とともに「四聖」と呼んでいます。



行基堂

竹林寺と往生院



喜光寺で没された行基は、生駒市有里の竹林寺に埋葬されました。火葬の場所は竹林寺に近い、興山の往生院との伝承があります。これらの寺院は、いずれも生駒山の東麓にあり、行基は、707（慶雲 4）年から 5 年間、この地の草野仙房で母親の孝養と自身の修養に専念していました。草野仙房は、竹林寺の前身と考えられています。竹林寺も明治以降に廃寺同然でしたが、昭和の末から整備がすすみ、現在は地元のボランティアにより、清掃活動や毎月の法要が行われています。

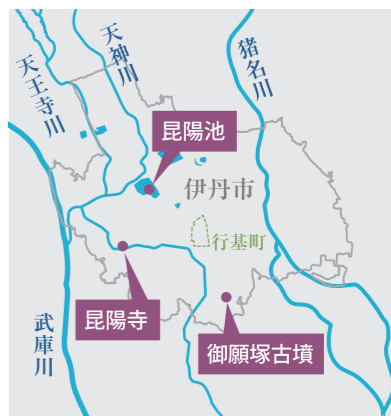


往生院



竹林寺の墓前で法要

行基さんへの親しみと敬慕
～伊丹台地へもたらされた恩恵～



1、はじめに
第15号「水が語るもの」トビックス「行基菩薩 生誕1350年」と「行基に学ぶ関西再発見の会」プロジェクト」に掲載されたように、今年、行基さんは1350歳になりました。

伊丹市民は、行基のことを「行基さん」と親しみを込めて呼びます。そんな昔に生きた僧だなんて思っていないかもしれません。また、「行基さん」は昆陽寺の愛称でもあります。なぜ、伊丹ではこれほどまでに行基が生活に密着しているのでしょうか？伊丹での行基愛についてご紹介しましょう。

2、行基の功績

行基は、畿内の各所において池・溝を築き、堀を掘り、川に橋を架け、道を整備し、布施屋を設けました。港の整備もしています。伊丹市域にも、昆陽上池・同溝、昆陽下池・同溝などが築かれました。それらは現在まで姿は少し変わったものの受け継がれています。

①昆陽上池・上池溝

昆陽池と天神川です。下池が江戸時代に

埋められ、人々は上池のことを「昆陽大池」と呼びました。その後、今のように昆陽池と呼ばれます。天神川が上池溝に、天王寺川が下池溝にあたります。

②昆陽寺

以前は、行基が築いた49院の一つで、昆陽施院が前身とされてきましたが、現在では昆陽布施屋に比定する説が強くなっています。なぜなら、施院が築かれたのは川辺郡山本里、布施屋は武庫郡に置かれたとあるからです。昆陽寺の立地は武庫郡域の北端。また、奈良時代当時



昆陽寺山門

は山陽道と有馬道（難波宮と有馬を結ぶ）が交叉する地で、まさに布施屋を置くのに適した地点でした。

③県指定史跡「御願塚古墳」

5世紀後半に築造された墳丘約50mの帆立貝式古墳ですが、約250年後に行基がこの塚で仏法の広まりと、工事の成功を祈願したので「御願塚」と呼ぶ、と伝わります。



御願塚の北に建つ「行基菩薩像」

3、遺産の保存継承

①昆陽寺文化財をまもる会

室町時代末期、伊丹有岡城主荒木村重が主君織田信長と争った際、昆陽寺の堂宇は全て焼失しました。江戸時代、門・堂・鐘楼などが再建され、現在、兵庫県指定有形文化財となっています。これらの建物・仏像を守り、継承する保存会が昆陽寺文化財をまもる会です。当会は昆陽寺に特化した団体でなく、昆陽井と呼ばれる武庫川からの水路を維持管理する水利組合が元になっています。西野・池尻・寺本・昆陽井といつた水が配られる旧村民で組織され、皆さんは昆陽寺を行基さんと呼び、常日頃より昆陽寺にご支援下さっています。毎年1月の「文化財防火デー」に合わせ、寺・会・市教委合同の消防訓練を実施しています。



昆陽井



行基橋

基町にある伊丹市立伊丹高等学校の校歌には、「香し聖者の名に負うところ」とうたわれます。

③市内小中学校

現在、小学校「社会」の教科書には行基が載り、6年生は東大寺の大仏を造ったこと等を習います。伊丹市の小・中学校社会科副読本では、行基を郷土の偉人として取り上げ、小学校用副読本では6頁も割いています。小学3年生は地域学習でこれを用い、行基の功績を学びます。5・6年生の多くは社会科見学で東大寺へ行き、大仏参拝するのが通例になっています。ですから、伊丹の子供たちは、「昆陽池をつくった行基さんは、その後、東大寺の大仏もつくった。」と印象づけられます（笑）

4、おわりに

このように市内各所に、行基の遺産、伝承が残り、さらには行基にまつわり創られたものがあります。それらは人々の日常生活に根ざし、「行基さん」を慕う思いは次世代を担う子どもたちに継承されていきます。皆様も行基さんに触れるヒトトキを過しに伊丹へ来られませんか？



社会科副読本「のびる伊丹市」

近畿の水

名橋

—第七回—

日本の橋は、江戸時代以前には、木橋が主流でしたが、耐用年数が短いことと、河川の洪水時の流れの厳しさと相まって、洪水時には流出してしまうことが多く、永久橋とは言い難く、頻繁に架け替えることが普通でした。この点は、現在も存続している、古代ローマの石造りの水路橋に代表されるような、ヨーロッパなどの永久橋とは、異なる特徴です。江戸時代の後期には、九州地方を中心として中国から導入された石造りの橋が存在していましたが、日本の永久橋の歴史は、明治以降に始まったと言えます。今号では、明治時代に造られ、現在も残っている橋を鉄橋を中心に紹介します。



神子畑鉄橋



1

鉦石運搬用の鉄橋

兵庫県朝来市の神子畑鉦山で1978（明治11）年に、銀鉦脈が再発見され、採掘された鉦石を生野にあった精錬所に運ぶために、1886（明治19）年から2年間で運搬路（馬車道）が整備されました。この工事は、生野鉦山開発のフランス人技師団の指導により、すべて日本人の手によって行われたものです。この運搬路の建設に伴い5基の鉄橋が掛けられました。1885（明治18）年完成の神子畑鉄橋と、1887（明治20）年完成の羽淵鉄橋の2基の橋が現存しています。優美な様式の姿を残している鉄橋の橋です。橋に使われる材料は、木材や石から、鑄鉄、錬鉄さらに現在の鋼鉄に発展してきました。現在の鋼鉄に発展してきました。現存する鉄橋は、架けられた神子畑鉄橋は、架けられた当時の位置のまま現存しています。羽淵鉄橋は、架けられた田路川の改修工事に伴い、移設保存されています。

2

羽淵鉄橋





6 浜中津橋 (旧十三橋)

鉄道用鉄橋

現存する日本最古の2つの鉄橋



国道176号が淀川を渡る十三大橋の左岸側の長柄運河に架けられた、国道の側道の橋です。この橋は、1874(明治7)年に開通した大阪と神戸間の鉄道橋などのために英国から輸入されたトラス橋119連をその後の1935(昭和10)年に転用して架設されたものです。材質は、現代の橋に使われている鋼鉄の一世代前の錬鉄で、形式はポニーウォールトラスです。当時の橋に少しの補修が加えられていますが、明治期の鉄道橋の様子がよくわかります。特に、トラスの部材をピンで結合していることが特徴です。道路橋の旧心齋橋を移設した、緑地西橋と併せて大阪には、日本最古の鉄道橋と道路橋が現存していることになります。

7 緑地西橋 (旧心齋橋)

道路用鉄橋

大阪市鶴見区の鶴見緑地内の歩道橋です。1873(明治6)年に長堀川に架けられた、心齋橋に使われていたものです。こちらは、ドイツ製で、弓形の形をした、材質が錬鉄と推定されるポーストリングトラスです。心齋橋は、1908(明治41)年に石造りのアーチ橋に架け替えられ、その後、5回目の転用により現在の箇所の主構のみが使われています。明治時代初期の橋の雰囲気をよく残しています。

おうじ 王子橋

1884(明治17)年に亀岡市の桂川の支川の鶴ノ川に架けられた現在の国道9号の石造りのアーチ橋です。設計は、琵琶湖から京都に用水を導水するための琵琶湖疏水の工事を担当した田邊朝郎です。明治維新の東京遷都によって疲弊しつつあった京都を活性化するために、北西部の丹後国の物資を円滑に京都に輸送することが課題となっていました。このために京都と宮津間の車道開設の工事が、1881(明治14)年から開始され1889(明治22)年に完成し、王子橋は、その形から「めがね橋」とも愛称され、京都と日本海を結ぶ交通を担っていました。その後、1969(昭和44)年に新しい車道橋が架けられたため、現在は人道橋として機能を果たしています。



【写真提供：国土交通省 京都国道事務所】

田邊朝郎設計のアーチ建造物

王子橋と同じく、田邊朝郎の設計による、南禅寺の境内を通過している琵琶湖疎水の支線の一部となるレンガ造りの水路橋です。延長93・17メートル、幅4・06メートル、水路幅2・42メートル。王子橋の後の1888(明治21)年に完成しました。南禅寺境内を通過するため、景観に配慮して設計されています。王子橋と水路閣は、どちらも印象がよく似ていて、田邊朝郎は、王子橋の経験を基に、琵琶湖疎水の大事業を開始したと言われています。

水路閣



播中おもいで橋

9

浜中津橋と同様に、鉄道橋として英国から輸入された橋が1952(昭和27)年に、加古川を渡るこの地点に転用されました。当初は3連が使用されていましたが、そのうちの1連が老朽化のため撤去され、現在は2連が現役の鉄道橋とし活躍しています。撤去された1連は、兵庫県加東市の県立播磨中央公園の歩道橋として、残されておき、当時の橋を身近に見て触れることができます。



8 神戸電鉄加古川橋梁と播中おもいで橋



5 和田旋回橋

明治の可動橋

明治期に造られた現存最古の可動橋で、JRの山陽本線から分岐する和田岬線が兵庫運河を渡るところに架かっています。兵庫運河は、西から兵庫港に入港する船が、波の荒い和田岬を避けて入港できるように1900(明治33)年に完成しました。運河を通行する船舶が通行する時には橋が磁石のコンパスのように旋回して通過を可能にするために、この運河の掘削に合わせて、当時5基の可動橋が架設されました。和田旋回橋は、現在は固定され旋回しませんが、当時のまま残っている唯一のものであります。

夢舞大橋—現代の旋回橋—

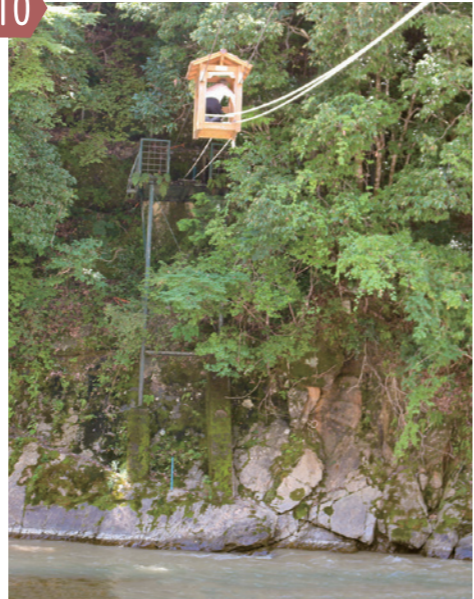
大阪港の夢洲と舞洲を結ぶ2001(平成13)年に完成した世界初の旋回式浮体橋です。2025年開催予定の、大阪万博会場の夢洲に渡る橋でもあります。上部工はダブルアーチ形式で、基礎は旋回を可能にするために、鋼製のポンツーン(浮き)2基により浮体構造となっています。大阪港の副航路に架設されているため、主航路で緊急事態が発生した場合にタグボートの曳航により橋を旋回させて、大型船舶の通行を可能にします。



十津川村の玉置神社は、世界遺産の「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部である大峯奥駈道の途中にあり熊野三山の奥の院として栄えてきました。重要文化財である社務所などの建築物とともに、境内には樹齢3000年といわれる神代杉を始めとする杉の巨木が林立しており、清浄な空気が荘厳な世界へといざないます。

10 十津川村の野猿

渓谷を渡る人カロープウェイ



十津川村にある「橋の原型」ともいえる「野猿」を紹介します。河川を横断して架けられたワイヤーにつるされた、籠の本体のようなものです。これに乗って河川を渡る人は、人力で付随するロープを手繰り寄せながら対岸に移動します。十津川村では、1889(明治22)年の十津川大水害で川が氾濫して川幅が広がりがり道路網が寸断された後に登場したのが始まりとされています。全国的には、江戸時代から越中富山の五箇山に同じ構造の「籠の渡し」がありました。十津川村での戦前の1938(昭和13)年の調査では少なくとも3か所が確認されていますが、移動の不便さのために、順次、吊り橋などに架けられ、現在は、全国的にも、湯川に架かるここに紹介したものと2か所が観光用に残っています。

世界の水

水辺空間を生かした都市再生の事例 —ヨーロッパ(その5) コッツウォルズ地方の水辺その1—

一般社団法人

近畿建設協会・技術顧問
元大阪産業大学教授

なかの まさひろ
中野 雅弘

はじめに

前回まではヨーロッパ大陸の水辺を紹介しましたが、今回は英国に戻り、英国内陸部の田園地帯にあるコッツウォルズ地方の小さな村々にある水辺を紹介します。ここでは、人々が自然とともにのどかな暮らしを営み、緑の丘と愛らしい家など時が止まったかのような田園風景が見られます。

まず、大学都市で有名なオックスフォードから訪れるストラットフォード・アポン・エイヴオンは、この地方の北の入り口になっています。そこから続くかなりの丘陵地帯がコッツウォルズ地方で、その地方を流れる川



とともに点在するいくつかの村々を訪ねます。

やランチを楽しむ人など、人々の憩いの場所になっています。この町は「コッツウォルズのベニス」と呼ばれるほど水辺が美しく、イギリスらしい歴史の刻まれた建物や素敵なカフェが建ち並んでおり、あまり観光地化されていない静かで美しい町並みで人気を呼んでいます。街の周辺は見渡す限りの草原に羊の群れがいるなど、のんびりとした風景が広がっています。

1. 英国の「ナショナル・トラスト」の活動

まず、英国において歴史的建築物などの保護や環境保護活動を説明するうえで避けて通れないのが「ナショナル・トラスト」の存在です。この団体の詳細な説明はここでは省略させていただきますが、単なる環境保護ではなく、歴史的建造物や景勝地を国民の遺産として保持することで、愛国心や国民の一体感といったナショナル・アイデンティティを形成・強化することを意義としている英国最大の自然保護団体です。英国には、古い建物などや美しい自然が保存されているのは、この団体の活動によるところが多いと思います。

2. ストラットフォード・アポン・エイヴオン

ストラットフォード・アポン・エイヴオンはシェークスピア生誕の地として有名で、水辺に開かれた美しい町です。この町は、イギリスで最



昔ながらの自動式の水門



運河はナショナルトラストが管理

エイヴオン川の鳥たち

も長い川であるセヴァーン川(全長354km)の支流エイヴオン川に面しており、近隣の農作物や牛などの市が立つ市場の町として発展して昔ながらの木造りの家が点在する町です。エイヴオン川にはかつて産業用に使われた運河が残され、それを観光用の幅の狭いボート(ナローボート)が舟運し、水面には白鳥などの鳥が泳ぐ風景が見られます。その運河や水門などの含めた一帯をナショナル・トラストが買い取り、維持管理面での運営を行っています。また、この団体は近くの公園なども保護のために管理しています。

3. コッツウォルズの村々

「羊の丘」を意味するコッツウォルズは、広大な丘陵地帯で多数の丘と農村が点在する牧歌的な地域であり、イギリスでも有数の美しい村が幾つかあります。古くは羊毛産業で繁栄した地域



マスが育つ豊富な水



川沿いに建つスワンホテル



アーリントンロー

川の水面には多くの野鳥が

周囲にはフットパスが

2) バイブリー

テムズ川の支流であるコルン川の両岸にあるいくつかの村で、一番有名な村の一つがバイブリーです。この村に14世紀から残された石造りの町並みは、「蜂蜜色の石」といわれる石灰岩が周りの緑と素朴な色彩を作り出し、古くから多くの人々によって称賛されてきました。特に、詩人・デザイナーのウィリアム・モリスが「英国で最も美しい町」と称賛しながら住んでいたのは有名な話です。また、豊富な水量のお陰で、地元に生息していたブラウントラウトを地元の川や小川へ放ち、現在で

はバイブリーマスとして養殖されています。また、14世紀に造られた「アーリントン・ロー」は羊毛の織工小屋であり、現在はイギリス文化財第1級建造物として登録され、歴史的建築物の保護団体であるナショナル・トラストが管理し、団体が建物を賃貸して今なお維持管理のために人が住んでいます。建物の低い屋根と切妻壁の家並みはまさにコッツウォルズ・スタイルを象徴しています。

また、川沿いには英国全国に張り巡らされた「フットパス(遊歩道)」があります。

わすれじ

英国は、首都ロンドンには現代的な橋(ミレニアムブリッジ)や大きな観覧車(ロンドンアイ)、超現代的なガラス張りの市庁舎など新しいものが目立つことがありますが、本質的には古い物を大切に保存しかつ活用することも忘れていません。英国の各都市の中心部は再開発され、近代的な建物が建ち並びますが、車で5分も走ると典型的な英国風景である「緑の芝生が広がる中、白い羊たちが草を食む」風景が目に見えてきます。最初に体験した時は驚きを覚えたものです。今回紹介したコッツウォルズ地方は、産業革命で取り残されたことから古い建物や手つかず自然が残され、その後再評価されナショナルトラストの活動とも相まって英国を紹介する代表的な地域になっています。



水辺には人々が集まっている



夕日を受け水面に映る石造りの家々



「十一面観音巡礼」で描かれている、渓谷から平野へ流れる木津川の風景



写真提供：国土交通省 近畿地方整備局 木津川上流河川事務所

川（泉川）が見渡せ、はるか南には奈良のほうを望む。
木津川沿いには十一面観音をまつ



位置図

歴史の筋を縫って流れる木津川

評論家・文化プロデューサー

河内厚郎



畿外と畿内をつなぐ
舟運

畿内と東国の関門は歴史の節目に重要な場となってきた。壬申の乱（672）で大海人皇子（のちの天武天皇）の軍勢が駆け抜ける様子を記した『日本書紀』天武天皇元年の

条には、大和から伊賀国隠郡に入った大海人皇子が横河に差しかかる。と、広さ十丈ほどの黒雲が天をよぎり、不思議に思った皇子はみずから笠竹をとって占った、とある。

名張市の中央部を北流する名張川の古名「横河」は、『日本書紀』大化2年（646）正月の条、改新の詔の、京師・畿内国司の創設の条に添えられた副文に「東は名懸の横河、南は紀伊の兄山（和歌山県伊都郡かつらぎ町背山）、西は赤石（兵庫県明石市）の櫛淵、北は近江の狭々波の合坂山（滋賀県大津市逢坂山）を畿内国とせよ」と記されている。

伊賀地方は天武朝（673～686）まで伊勢国に属したにもかかわらず近畿圏との結びつきがよかつた。伊勢の諸河川が伊勢湾へ注ぐのに対し、三重県の青山高原に源流をもち、名張川や和東川などの支流と合流して、京都府八幡で淀川に流入し、大阪湾へと注ぐ木津川は、古代には

山背川（日本書紀）や泉河（万葉集）などと呼ばれ、流域によっては伊賀川（京都府南山城村の名張川合流地点まで）や笠置川（京都府相楽郡笠置町付近）とも呼ばれる。白洲正子の随筆集『十一面観音巡礼』（1975）の「木津川にそって」という一章には、「伊賀の山中に発する木津川は、南山

城の溪谷を縫いつつ西へ流れる。笠置、加茂を経て平野に出ると、景色は一変し、ゆるやかな大河となって北上する。その川筋には、点々と、十一面観音が祀られている」とあり、その「景色が一変」するあたり、十一面観音で知られる海住山寺（京都府木津川市）の境内からは、「みかの原 湧きて流るるいづみ川 いつみきとてか 恋し かるらむ」と、三十六歌仙の一人、中納言兼輔（藤原兼輔）が詠んだ瓶原や木津



中納言兼輔の歌碑



海住山寺 本堂



海住山寺 五重塔

る寺院が目立つ。その多くが水瓶を持つ十一面観音は「水の神」でもあり、山城・大和・難波を結び、寺院建築のため木材などを運ぶ交通の動脈であった木津川の水運の安全を願い、また洪水が起きないようにと、「水の鎮め」のために十一面観音がまつられたのではないかと正子は綴っている。

古代には「泉津」と呼ばれ、川の名も泉川と称された「木津」の名は、水運を利用する材木の集積港に由来する。持統天皇の藤原京（694～710）造営工事に従事した万葉集の民の歌には、田上山（滋賀県大津市）の木材を宇治川・木津川を經由して運んだとある。藤原京から平城

京に都が遷ってからも、木津川上流の伊賀、宇治川上流の近江、桂川上流の丹波といった国々や瀬戸内諸国から運ばれてくる物資は、泉津で陸揚げされてから人・馬・車で運ばれ、平城京内の宮殿や邸宅・寺院の建設に使われた。木津川を通じ泉津と近い加茂町銭司（木津川市）にあった「岡田鑄銭司」では、奈良時代の和同開珎・万年通宝・神功開宝、平安時代の隆平永宝といった通貨が製造され、木津川の舟運により運ばれた。製材場や市場の機能をそなえた泉津は、都の役所と大寺院の出先機関「木屋所」などが設けられた港湾都市であった。

平城京の北に連なる高さ100メートル前後の丘陵、奈良山は、大和と山背の国境を成し、旅に出る人と見送る人は奈良山を越え泉川（木津川）の川原で別れの挨拶を交わした。歌曲「平城山」（作詞：北見志保子）では、「人恋ふは悲しきものと 平城山に とほり来つつ たえ難かりき」「古へも夫に恋ひつつ 越へしとふ 平城山の路に 涙おとしぬ」と歌われている。

聖武天皇の恭仁宮

天平2年（730）9月、行基上人が平城京の東の丘陵・飛火野に何千人という民衆を動員したという集会所を再現する催しが、10月20日、奈良公園特設会場で行われた。行基の誕生から1350年を記念する催しであった。

行基（668～749）が生まれ育った和泉国大鳥郡（堺市西区）は、海外渡来の文化・知識・技術が定着していた土地柄で、行基の両親も百濟から来た渡来人の子孫であった。先進的な土木技術により、道路を整備し、橋を架け、洪水や水不足にも困らぬよう水池や灌漑用水路を造り、旅人や病人のための施設を開設



重要文化財 十一面観音立像 写真提供：海住山寺



恭仁京付近の木津川（左が恭仁大橋、右が恭仁京跡）
写真提供：国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所

わる北王塚が残る。
天平13年元旦。まだ宮垣の完成しない恭仁宮での朝賀の儀式は帷帳（とばり）を巡らして行われ、8月には東西市を新しい京へ移し、9月には賀世山（鹿背山）の西道より東を左京、西を右京と定めた。京の真ん中を鹿背山が南北に伸び、その北で泉川（木津川）が大きく曲がって、木津川を望む左京のいちばん高いところに宮があるという構造は、唐の洛陽城に似ていた。当時の遣唐使が見た洛陽城の、中央部を洛水が流れ、皇帝が政務を執る宮城や東城（官庁



東大寺 行基堂



泉橋寺（泉橋院の後身）

して民衆の崇敬を得ていく、行基の活動を弾圧していた朝廷も、しだいに受け容れ、やがては利用するようにならっていく。
天平13年（741）3月。恭仁京の郊外、木津川のほとりの泉橋院で聖武天皇と会見した行基は、15年には東大寺の大仏像造営の勧進に起用

され、17年には仏教界における最高位「大僧正」（日本初）を贈られたが（続日本紀）、天皇と行基が会った恭仁京とは、どのような都だったのだろう。
平成20年（2008）11月、大臣級の役人たちが政務や儀式を行なった朝堂院の遺構が木津川市の恭仁宮跡から出土した。天皇が執政した大極殿を囲む回廊の、北西角の遺構の配置は平城宮と同じで、大極殿も平城京第一次朝堂院にともなう大極殿相当建築と同規模であり、「平城宮の大極殿と回廊を恭仁宮に移築した」という『続日本紀』の記述が裏付けられた。大極殿の西側と西北側の二ヶ所で官衙だった建物や朝堂院の南限を確認できる南門跡も見つかり、朝廷に出仕する臣下や官人の控えとなる、朝集殿とおぼしき土堀の柱跡も検出された。
昨年1月には、恭仁宮跡から約5キロ南西の国道163号バイパス建設予定地から、基盤の目のような区画（条坊）跡が見つかっている。南北に走る道（幅6・7メートル、長さ約41メートル）と直角に交わる道（幅7メートル、長さ約21メートル）
街）は西北にあるとの情報を基に宮都は造営されたのであろう。甕原を中心に木津川（泉川）が西から北へ流れを変えるあたりに恭仁京を造営する工事には、大和・河内・摂津・山背から集められた五千五百人の人が従事し、不足の労働力を補うため畿内や諸国から優婆塞（出家希望の修行者）が集められた。工事が終了して僧になった者は750人を数えたという。「今造る久遠の都は山川のさやけき見ればうべ知らずらし」（都にするのがもつともなことだと思われる）（大伴家持）という恭仁京を讃えた歌碑が、木津川に架かる恭仁大橋の袂にある。
藤原氏との因縁深い平城京を捨て、この地に移ったのは、広嗣の乱を機に勢力拡大を図った諸兄の勧めによると見られている。広嗣の乱の傷跡も生々しい政情不安の世、この美しい盆地で平和と繁栄が取り戻せるよう期待された都であったが、短命に終わった。
天平14年（742）2月、恭仁宮の東北、近江国伊賀郡に通ずる山道を開通させた聖武天皇は、8月には甲賀郡に離宮を造営して行幸。翌15



恭仁宮跡復元図

資料提供：木津川市教育委員会

が確認され、道に沿って整然と並ぶ建築物も見つかった。
何故、この地に都がつくられたのだろうか。
天平12年（740）、聖武天皇の従父兄にして光明皇后の甥にあたる、藤原広嗣が九州で反旗を翻した。伊勢国の行宮で広嗣の死の報を受けた天皇は、美濃・近江を巡り、恭仁郷に到着。この行幸中に山背国相楽
年10月、紫香楽で「大仏造立の詔」が出される。前年、河内国大泉郡（大阪府柏原市）の智識寺で高さ18メートルの盧舎那仏を拝し心うたれた天皇は、巨大な盧舎那仏の建立を思い立ったのである。恭仁京の建設工事は中止されてしまい（15年12月）、翌16年2月、聖武天皇の即位とともに造営の始められた難波宮（大阪市中央区法円坂）に遷都する。難波宮は孝徳朝の首都や天武朝の副都が置かれた由緒ある地であったが、結局、平城京へ遷都することとなった。

古事記に登場する
木津川

奈良時代より、もともと古くから、木津川の流域は歴史に登場している。「古事記」によれば、難波の高津に宮居した仁徳天皇の皇后・磐之媛が豊楽（宮廷の酒宴）に用いる御綱薬を探りに紀伊熊野へ出かけた留守中、天皇は八田皇女を宮中に引き入れた。難波に帰りそれを知った皇后は、御綱薬を海に投げ棄て、淀川から山背川（木津川）を船で遡って筒城岡の南に宮室をつくり籠ってしまふ。天皇は船で淀川・木津川を遡り

郡恭仁郷への遷都の議が起り、右大臣・橘諸兄が宮づくりを始めていた。既に木津川のほとり恭仁の地には聖武天皇の離宮・甕原宮（加茂町法花寺町、鹿背山の北麓）があり、橘諸兄も甕原の下流、現在の京都府井手町あたりに別荘「相楽別業」を構え、「井手左大臣」と呼ばれていた。諸兄の創建という橘氏の氏寺・円堤寺（井手寺）の跡や、諸兄の墓と伝
帰ってほしいと懇願するが、ついに顔を見せなかった皇后が生涯を終えたという「筒城宮」の所在地も、のちに継体天皇が住んだという筒城の宮とどんな関係にあったかも不明である。田辺町郷土史会が大字多々羅字都谷（京田辺市、同志社大学構内）に「筒城宮址」の碑を建てているが、確証はない。
山背国は、養蚕・繊維の技術を招来した秦氏をはじめ、多くの渡来人が住みついた土地で、磐媛が身を寄せたという「筒木の韓人奴理能美」は、養蚕を営む百済渡来人集団の首長であった。天皇が磐媛との復縁を懇望して振舞ったのも、磐媛の父、葛城襲津彦の昔から朝鮮渡来人との縁故が深い大族であった閩閩の葛城氏や、そのバックにある山背の渡来人勢力を軽視できなかったからであろう。
中世に入ってから、伊賀国・東大寺領の山山からは多くの材木が泉津まで流された。木津川の舟運は近世に入りいよいよ盛んとなるが、明治30年（1897）の関西本線「上野」「加茂間」の開通により衰退し、昭和初期には姿を消した。

昭和28年9月 台風13号による淀川の大水害(Ⅰ)

工学博士 宮井 宏

1. 台風13号による淀川の大水害

・台風13号は、昭和28年9月16日夜トラック島近海で熱帯性低気圧として生まれ、18日にはグアム島南東400kmで中心気圧998mb、中心付近の最大風速30m/sとなり、台風13号(5313)(TESS)と命名されました。22日には中心気圧897mb、中心付近の最大風速75m/sの猛烈な台風に成長し、25日には進路を北ないし北北東にとり、紀伊水道より大阪湾に襲撃するものと予想されていましたが、25日14時頃になって急遽潮岬のすぐ南方を通過し伊勢湾を横断、18時頃岡崎付近から東海地方に上陸するとの見込みになりました。

・台風の進路予想が変更されますと、台風による災害への備え方も変わってきます。台風が大阪湾を直撃する場合は高潮と風害に対する備えが重要となりますが、図1のような台風が紀伊半島をかすめる場合には淀川、由良川、猪名川、熊野川等で水害に対する備えが重要となります。

・台風13号の本土接近とともに前1000町歩が浸水。
・25日21時、木津川の加茂ではほぼ最高水位と見られる水位7.65mが観測され、桂川の桂で昭和13年の既往最大3.99mをはるかに超える4.71mが観測され、淀川本川枚方では6.1mが観測されなお上昇中でした。

・木津川の加茂、桂川の桂について、それぞれの流域の総雨量および降雨強度より最大流量と最高水位を推定する洪水予報図を用いて、枚方の最高水位を推定する作業が始められました。(洪水予報図の詳細については次の3. 昭和28年頃の洪水予報技術で説明します。)

・加茂上流域の雨は25日18時がピークで、加茂の最高水位は25日21時前後です。そして加茂から本川枚方までの流下時間を7時間としますと、加茂のピーク流量が枚方に到達する時刻は26日4時頃となります。したがって枚方の水位曲線をこの時刻まで延長すれば枚方の最高水位は7.5mと推定されます。

・もう一つの推定方法もあります。加茂の予想最高水位は25日21時に7.65m(≒7.7m)ですから、



図-1 台風、本土中部を縦断、諏訪付近で分裂、衰う 朝日新聞(昭和28年9月26日)

線活動が活発となり、総雨量で60〜70mmの前期降雨が降り始めます。ついで台風が図1の15時前後の位置に來ますと台風の主降雨が降り始め、琵琶湖・宇治川、木津川および桂川の各流域で25日12時〜19時(15時の前3時間〜後4時間の計8時間)の間に、時間雨量21mm、20mm、18mmの雨が降り続きます。その結果前期降雨も合わせた総雨量は琵琶湖・宇治川流域で235mm、木津川流域で258mm、桂川流域で256mmに達しました。

・このように台風13号による大雨は、淀川全流域にほぼ均等に、しかも25日12時〜19時のほぼ同時帯に纏まって降り降りました。そのため宇治川、桂川、木津川からの洪水流がほぼ同時に淀川で合流することとなり、そのため淀川は破堤、氾濫の危

水位・流量曲線を用いれば流量は4700m³/s(淀川百年史)になれば、この水位は正しいが、流量は修正すべきとされています。また、3. で使用する洪水予報図によれば既に修正済で5700m³/sとなっています。)となります。同様に桂の流量も予想最高水位4.8mで2600m³/s、宇治川の流量は500m³/sとして、これら3流量が同時に合流すると合計流量は7800m³/sとなり、水位・流量曲線を用いて枚方水位を求めると7.3mと推定されます。淀川の堤防高は8.3mですから、以上二つの結果から堤防余裕高は1m弱となります。

・25日21時30分、近畿地建は淀川洪水警報第3号(最悪事態宣言とも呼ばれる)「その後の水位状況より判断すれば、淀川は未曾有の増水を来し、枚方の水位は22時頃7mを越え、なお26日4時頃まで増水し、最悪の場合は破堤のおそれがあるから嚴重なる警戒を必要とします。危険箇所では水防本部の指示に従い、あわてずに避難の準備の措置をあわせ講ぜられたい。一般の人に対して

機に見舞われましたが、松尾川、芥川、宇治川左岸が破堤・氾濫したため辛うじて危機を免れることになりました。

・当時、淀川およびその周辺の氾濫・水没地は、松尾川左岸(浸水面積480町歩)、芥川右岸(同1000町歩)、宇治川左岸(同2880町歩)の他、琵琶湖周辺で4500町歩、上野盆地で1000町歩、亀岡盆地で800町歩あったといわれています。松尾川、芥川につきましてはこの後4.(2)、(3)で、また宇治川左岸につきましては次号で詳しく説明させていただきますが、その他につきましては当時の資料が入手でき次第本誌で報告させていただきます。

2. 台風13号による大雨と淀川洪水警報

・この当時近畿地方建設局(現近畿地方整備局、以下近畿地建という)調査課洪水予報係では、大阪管区気象台より発表される台風情報および淀川流域35カ所の雨量観測所と26カ所の水位観測所から送られてくる非常電報や電話の聴取、無線局との通信連絡等を行いつつ、これらの資料をもとに淀川洪水警報を発表してい

は流言飛語に惑わされず落ちついて行動されたい。」を発表しました。

・こうした洪水警報のもと、淀川下流では極度の緊張のうちに住民の避難、必死の水防作業が続けられていました。

・淀川洪水警報第3号の後、加茂水位は想定どおり22時には最高水位7.7mとなりましたが、枚方水位は23時15分に予想を下廻る6.97mとなり、これをピークに減水が始まりました。間もなく22時過ぎに宇治川の向島の堤防が切れたとの連絡も入りました。近畿地建ではこれ以上淀川の水位は上がらないとして淀川洪水警報第4号、第5号を発表し、併せて同警報の解除も行いました。

3. 昭和28年頃の洪水予報技術

・昭和28年の台風13号から約10年後、技報室から「防災ハンドブック」が出版されました。その4編6章「水防と洪水予報」を昭和28年頃近畿地建洪水予報係の担当官として当時の洪水予報システムを作り上げた藤野良幸が執筆しています。ここでは4編6章中の「最大流量とその時刻の予報」を紹介するとともに台風13号

ました。

・9月25日14時、大阪管区気象台は台風情報第5号を発表し、台風13号が淀川流域の東側を通過することを明らかにしました。近畿地建もこれに連動して、14時30分に淀川洪水警報第1号「淀川本川枚方の水位は、夜半には警戒水位4.5mを突破し、最高水位は6m位になる。」を発表しました。

・25日14時50分、松尾川左岸堤が決壊しました。近畿地建にいつ連絡が入ったかは分かりません。

・25日18時、加茂水位が5.70mとなりました。同時に枚方水位の入手も急がれたのですが枚方無線局は故障しており、19時に漸く4.84mと警戒水位4.5mを突破したことが確認され、20時淀川洪水警報第2号「淀川の水位は間もなく計画高水位6.36mを越え6.70mに達し、最大流量も7000m³/sに達する。」が発表されました。

・25日16時30分、女瀬川と芥川の合流点で約15mが決壊、その後淀川本川水位の上昇とともに淀川の水が逆流して決壊口から氾濫。富田町、三箇牧村、鳥飼村、味生村一帯約

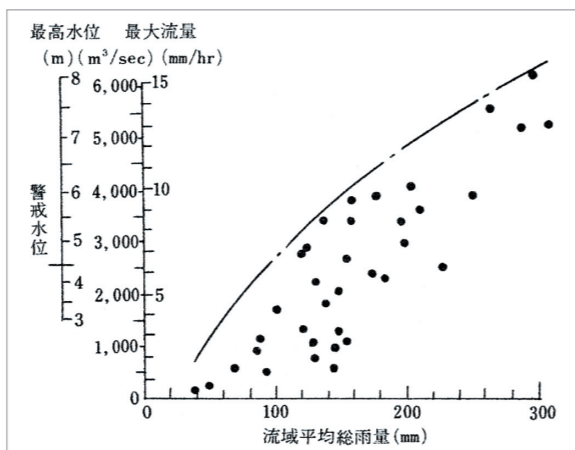


図-2 洪水予報図(木津川加茂地点の場合)

出水への適用例も説明します。

・本文で用いる加茂上流域の雨量記録は全て「近畿水害報告 昭和29年3月 近畿地方建設局」によつています。したがって加茂上流域の雨量としては、12雨量観測所の時間ごとの平均値を使用します。

・さて、台風13号出水で9月25日20時までに加茂上流域に降った流域平均総雨量は252mmでした。図1-2に示したのは藤野良幸が作成した木津川加茂地点の洪水予報図です。また、桂川の桂地点についても同様の予報図がもう一枚あった筈ですが、今は失われておりません。図1-2の横軸に雨量252mmをとり、図中の



図-3(a) 淀川堤防の被災箇所

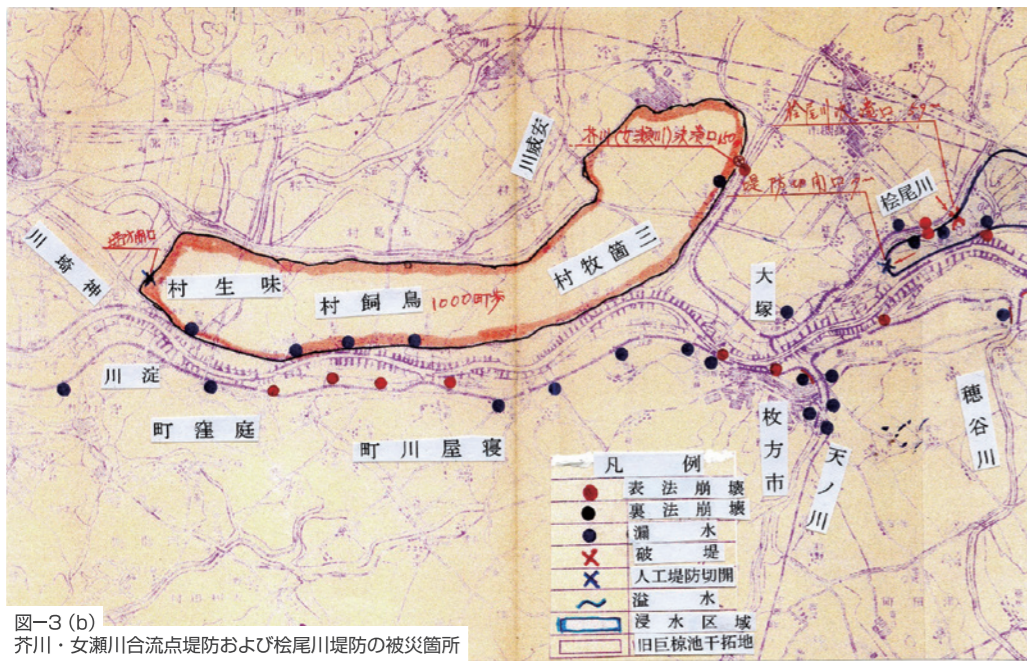


図-3(b) 芥川・女瀬川合流点堤防および松尾川堤防の被災箇所

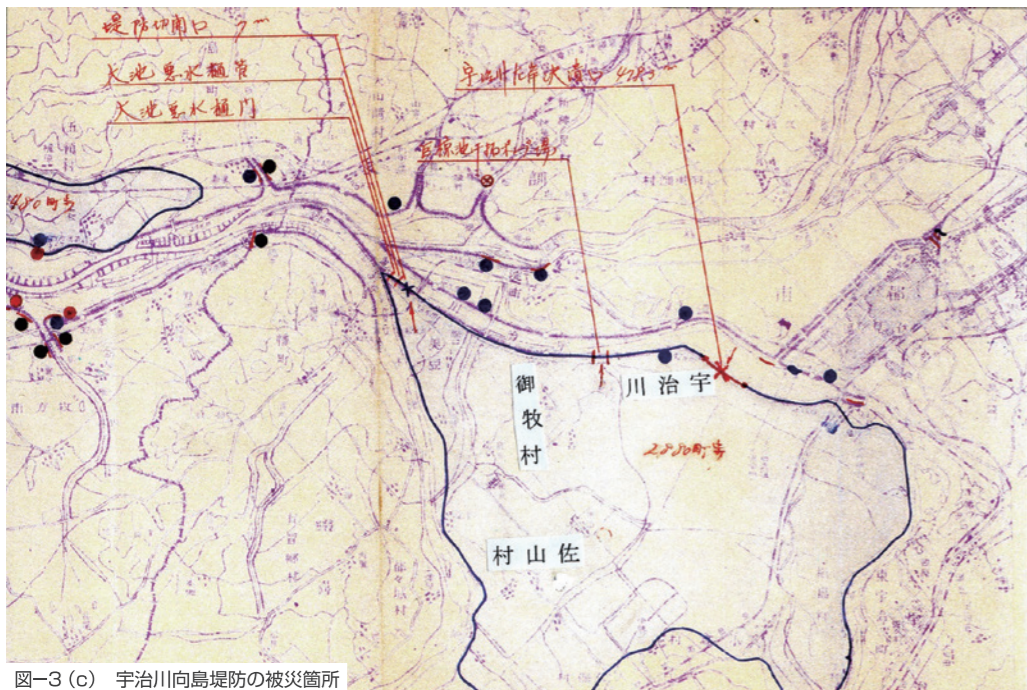


図-3(c) 宇治川向島堤防の被災箇所

(2) 松尾川の決壊(元建設省福知山工事事務所長 佐野嘉政氏へのインタビューによる)
 ・9月25日午後2時50分、深江見張り所の技官佐野嘉政は松尾川の演習橋の上から堤防の見回りをしていたが、そのときふと足許の水面を見ると松尾川の水が上流

に向かつてゆっくり流れているではありませんか。佐野は咄嗟に「切れた」。堤防が切れた」と叫びながら上流に向かつて駆け出しました。松尾川の淀川合流点から2番目の橋、中堤橋の少し上流で松尾川左岸堤が決壊してゴウゴウと

五領地区に唸りを立てて水が流れ込んでいました。
 ・破堤箇所は、松尾川左岸の建設省施工区間27・5m、大阪府施工区間31・5mの計59m、浸水田畑は五領地区と島本町の一部を合わせて480町歩、浸水家屋は400

戸でした。水害後4日経った28日にも減水せず、非常手段として水捌け促進のために演習橋下の淀川堤防を切開(わざと切り)して排水するとともに、人工切開箇所にはポンプ13台(計315馬力)を設置して応急排水をしました。佐野は、

平均をとる時間	f	rℓ
9	0.83	1.1
12	0.98	1.2

表-1 平均をとる時間(hr)、流出係数f、損失雨量rℓ(mm/hr)

式-1 $Qp = (1/3.6) f (r-rℓ) A$

日時	12観測所の 平均値	9時間 平均値 18.4	12時間 平均値 14.9
25日1時	5.5		
2	5.3		
3	5.7		
4	6		
5	6.1		
6	8.6		
7	3.2		
8	1.8		
9	1.9		
10	5.3		5.3
11	6.9	6.9	6.9
12	10.9	10.9	10.9
13	16.4	16.4	16.4
14	24.2	24.2	24.2
15	22.9	22.9	22.9
16	25.6	25.6	25.6
17	24.8	24.8	24.8
18	27.7	27.7	27.7
19	6.4	6.4	6.4
20	3.9	3.9	3.9
21	3.8	3.8	3.8
22	1.4	1.4	1.4
23	0.4	0.4	0.4
24	0.1	0.1	0.1

表-2 加茂上流域の12観測所の平均時間雨量

式-2 $Qp = (1/3.6) f (r-rℓ) A = (1/3.6) \times 0.83 (18.4-1.1) \times 1456 = 5800 (m^3/s)$
 $Qp = (1/3.6) f (r-rℓ) A = (1/3.6) \times 0.98 (14.9-1.2) \times 1456 = 5430 (m^3/s)$

曲線との交点の高さを縦軸の最高水位と流量で読み取りますと、最高水位は7・5m、最大流量は5660m³/sとなります。そして時刻が22時になりますと加茂量水標の水位が7・7m、水位と流量曲線(または図1-2の縦軸)より流量5800m³/sと読み取れます。両者を見比べると藤野の方法は2時間の予測時間とかなりよい精度で予報することができたと言えるでしょう。

・藤野良幸の考案したもう一つの最大流量予測法を説明します。加茂の最大流量Qp(m³/s)を流出係数f、洪水到達時間内の最大平均降雨強度r(mm/hr)、損失雨量rℓ(mm/hr)、流域面積A(km²)を用い式-1により求める方法です。
 ・加茂のQpを求める場合は加茂の表-1は、加茂上流域

流域面積A=1456km²とします。洪水到達時間内の最大平均降雨強度rを求めるには表-1の平均時間12時間または9時間を用い、流出係数は0・98または0・83を、rℓは1・2または1・1を用います。上式については過去の数多くの木津川の洪水資料を調査し、用いた洪水資料は全て前期降雨(60〜100mm)により初期損失が満たされた場合の資料が用いられたとされています。したがって今加茂のQpを求めるに当り、前期降雨量を確認しておきますと、加茂上流域の12観測所平均の前期降雨量は9月24日6時〜25日9時迄で77mmあることが確認できます。
 ・表-2は、加茂上流域

の全12観測所の平均時間雨量から25日1時〜24時のデータを切り取ったものです。
 表-2のデータから、9時間または12時間の平均降雨強度が最大になるような時間雨量の組を選び、その平均値を求めます。表-2の赤字が9時間の組で平均値が18・4、青字が12時間の組で平均値が14・9です。計算は式-2となります。
 これに加茂の流量推定値として、二つの方法により5660(m³/s)、5800(m³/s)、5430(m³/s)の三つの解が得られた訳ですが、藤野良幸の第2の方法の平均降雨強度18・4から得られた5800(m³/s)は量水標による実測値と一致していますので、この推定値がベストと言わざるを得ません。また、量水標で最高水位、最大流量が確認できるのは22時で、Qpが求まるのは19時ですから予測時間は3時間ということになります。
4. 淀川中、下流部の被災状況
(1) 堤防漏水等
 ・図-3(a)、(b)、(c)は、台風13号による淀川堤防の被災箇所平

面図です。被災箇所は、破堤3箇所、「わざと切り」3箇所、堤防表法崩壊14カ所、裏法崩壊8カ所、漏水42カ所の計70箇所にはなっています。
 ・堤防表法崩壊、裏法崩壊、漏水等の具体の被災状況は資料が少ないためよく分かりませんが、枚方市史と摂津市史に若干の記録が残されています。
 ・枚方および対岸の鳥飼村付近では、淀川堤防堤体の軟弱化により堤を没する所ができていたり、堤防外側の各所に陥没箇所(裏法崩壊)ができていて、それを補修するのに1カ所で土俵80俵も要する箇所がありました。
 ・鳥飼村地先の淀川では、25日午後8時30分水位が5・86mに達し、堤防からは漏水による大噴水が起こり始めました。10時、遂に淀川水位は6・52mに達し、中段堤防以下の各所で漏水、落盤、亀裂、崩壊が起こり、堤防は微動を感じるほどで決壊寸前の大危機に遭遇しました。水防消防団員による決死的防禦と警察予備隊、保安隊の応援補強工作の甲斐あってからうじて事無きをえました。



写真-4 三箇牧村小学校への給食運搬舟

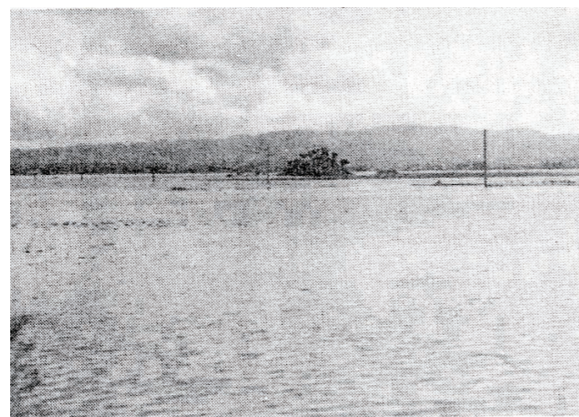


写真-3 三箇牧村役場より奥田山を望む(9月28日午後1時写す)

は府の正式許可を待たずに26日夕から切開作業をはじめた。これに対し対岸の大阪東淀川区江口町付近住民が反対。「切る」「切らさぬ」で同夜両岸住民が川をはさんで争い、険悪な空気になった。府土木

破堤箇所の向かい側、松尾川右岸にある野田神社の隣に災害復旧工事の見張り小屋を建て、そこに2週間泊まり込みで復旧工事を仕上げました。

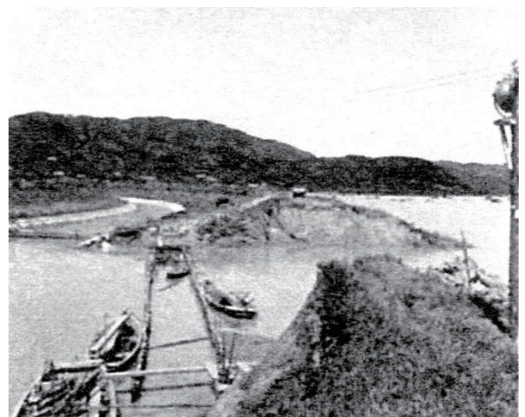


写真-2 松尾川左岸決壊口と仮締切工を下流より見る



写真-1 松尾川破堤のため上牧府宮住宅から天井、屋根を破って避難する人達

切開口の補強工事が完成する27日夕刻までは水は流さないが、対岸の神崎川左岸の堤防補強工事は同朝完成しており、この新しく切開した排水口を現在以上拡張しなければ同川の堤防決壊の心配はないものとみられている。

部では事態を重視、広長部長らが現地を視察、味生村関係者と協議して「府で大阪市側岸が危ないと判断した場合、いつでも村民は府に措置をまかせる」との条件で工事を続行。同日11時ごろ切開工事を終った。これについて広長部長は「あの切迫した空気の中で切開作業を止める、止めないと争っていたのでは必ず流血さわぎになると思った。また一度切開しかけた堤防を埋めさせたところで元通りにはならないので、すでにやりはじめたことに対する後始末として、村側に責任を持たせて工事の続行を許したわけだ。ただしこれは切開作業を正当と認めたわけでは絶対ない。知事の管理権に属する堤防を無断で切った味生村側の越権行為は、実情をよく調べ適当な処置をとる」といつている。

2. 三箇牧地区への浸水防止方手配。19時20分 風速次第に弱まる。19時50分 安威川の水位最高時4m50なりしも漸次減水し3m80なり。20時10分 三島江、柱本、西面、唐崎の各字総代参集

17時50分 三箇牧郵便局長より「芥川・女瀬川の合流点決壊」の報あり。18時30分 風速はやや衰えたるもなお家を揺るがす凄まじさである。19時 芥川・女瀬川合流点決壊箇所確認の三氏帰任。
1. 芥川、女瀬川合流点の右岸側(富田側)で約15m決壊。(図1-3(b)では150m決壊となつていますが、これは淀川からの逆流による決壊口の拡大によるものと思われまます。)

(3) 芥川の決壊
「13号台風と私」28年水害の記録」三島江自治会長 中浜哲夫より抜粋(「13号台風の足あと」昭和二十八年水害を顧みて)「三箇牧地区連合自治会」
9月25日 正午頃より風速強まり、雨足益々激し。
14時 停電のため情報源のラジオはぶつたり。電話が通じているのは何よりの頼り。
15時 屋根瓦が飛び始める。
16時50分 中央気象台より4時38分暴風雨特報が発せられる。
17時50分 三箇牧郵便局長より「芥川・女瀬川の合流点決壊」の報あり。

参考文献について

「昭和28年8月 南山城大水害(Ⅰ)」、「(Ⅱ)」、「(Ⅲ)」の執筆にあたり多くの文献を参考にさせて頂くとともに引用させて頂きました。南山城水害の生々しい体験を災害誌や機関誌として後世に残して頂いた先人達に敬意と感謝を表するとともに、南山城地方の治山・治水の歴史に関心を持たれ、今後さらに研究を志される方々のためにも改めて引用文献等を記載し、参考に供させて頂きます。

水が語るのもの第13号掲載
昭和28年8月 多羅尾大水害と南山城大水害(Ⅰ) 参考文献
1) 山城綴喜郡誌、京都府教育委員会綴喜郡部会編、1908年
2) 信楽町史、信楽町史編纂委員会編、信楽町発行、1957年
3) 上野市史、上野市発行、1961年
4) 天下一統、日本の歴史12、林家辰三郎、中央公論社発行、昭和59年
5) 多羅尾村昭和40年大水害誌、多羅尾尾区編、信楽町多羅尾区出版、1989年
6) 三重の歴史、三重県史編纂グループ著、新人物往来社発行、2006年
7) 現代語訳「信長公記」太田牛一著、中川太古訳、KADOKAWA発行、2013年
8) 平成27年度特別展近世狭山池田図―水と農民の狭山池改修史―大阪府立狭山池博物館編集・発行、2015年

水が語るのもの第14号掲載
昭和28年8月 南山城大水害(Ⅱ) 参考文献
1) 井手町史シリーズ特別編 南山城水害誌、井手町史編集委員会、南山城水害30周年記念誌編集委員会、井手町発行、1983年
2) 山城町史、山城町発行、1987年
3) 南山城水害誌(高麗村にみる記録) 1. 大西康允、1956年「やましろ」27号、城南郷土史研究会、2013年
4) 南山城大水害60年シンポジウム水害体験集、木津川市山城総合文化センター、平成25年9月25日

水が語るのもの第15号掲載
昭和28年8月 南山城大水害(Ⅲ) 参考文献
1) 河川工学百年の歩みと淀川、河川工学百年の歩みと淀川編集委員会、建設省近畿地方建設局発行、1978年
2) 木津川砂防百年のあゆみ、近畿地方建設局編集、木津川上流工事事務所発行、昭和56年
3) 山城町史、山城町発行、1987年
4) よみがえったふるさとの山々―蘭人工師テレーケと山城町―、「山城町とテレーケ」編集委員会編、山城町発行、1992年
5) 特別展 水とのたたかい―南山城水害から50年―、京都府立山城郷土資料館発行、2003年
6) 南山城水害誌(高麗村にみる記録) 1. 大西康允「やましろ」27号、城南郷土史研究会、2013年
7) 南山城水害誌(高麗村にみる記録) 2. 「やましろ」28号、城南郷土史研究会、2014年

1. (淀川)水位が6mに達すれば、増水的情勢を勘案して退避命令を出す
2. 西面の退避は、玉川橋に老人、子供を集結させ富田町、地方事務所より差し回しのトラックにて避難させる
3. 三島江、柱本は三島江新堤に避難
4. 唐崎は旧堤上とする
21時55分 淀川の水位6m35、今後10分間に5cm増水の見込み、警戒警報発せられる。
22時 富田町より「21時30分現在建設省発表にて、淀川の水位7mに達し、明朝4時まで増水の見込み。決壊のおそれあり」。村長直ちに避難命令を発せられる。
26日2時 西田堤防遂に決壊
3時30分 濁水は3箇牧地区へ滔々と流れ込む。
4時30分 濁水が無気味な音を立てて西面、三島江地区に流入する。
11時 浸水は11時が最高
27日 庭の水は大分引き、2、3寸となった。濁水は味生村下の神崎川放水路堤防で袋水となり捌け口が無いため、村独断でこれを切開(わざと切り)している由。三箇牧からも有志の方々が応援に駆けつけた。
(4) 堤防の切開(わざと切り)終る―芥川の濁水を神崎川へ朝日新聞(昭和28年9月27日)
台風で決壊した淀川支流芥川の濁流のハケ口を、神崎川堤防の切開に求めた大阪府三島郡味生村村民

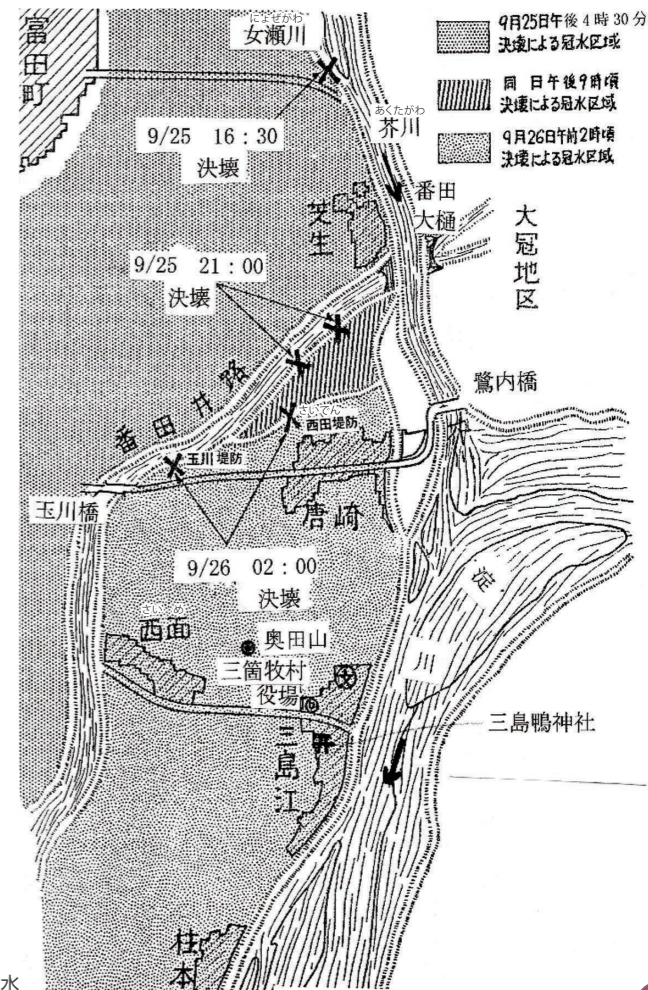


図-4 芥川、女瀬川合流点堤防の決壊により三箇牧村から味生村まで浸水

水都大阪と幻の大阪大国技館(9)

水都の会城北川プロジェクト(代表 藤井 薫)

平成30年、大阪は大変な夏を迎えました。記録的猛暑に加え、大阪北部地震や猛烈な台風が立て続けに襲い、大阪にしては有数の災害年と思われたかもしれません。



しかし、上の写真をご覧下さい。見渡す限りの水面に家の屋根が覗いています。実はこれは明治18年の淀川大水害の際、大阪城から東の方角を見た写真です。

「西と違うの?」と疑問に思われたかもしれませんが、恐ろしいことに東なのです。しかも、これが史実で終わらないかもしれないのです。何故なら現在でも大水害と大震災が重なれば、堅牢な淀川の堤防といえども決壊しないとは限らないからです。

明治期の大阪の地形と現在とは殆ど同じですから、市内の大半が水没し、古代の「河内湖!」が蘇るかもしれないのです。



明治18年 淀川大水害浸水エリア (矢印は大阪城から見た方向)



弥生時代の大阪地形図

大大阪を造った淀川改修事業
淀川改修事業の完成(明治42年)以前の大阪は、毎年のように水害に見舞われていました。しかし大正6年の高槻大洪水(大塚切れ)の後は、淀川で大規模な決壊はなく、水害への恐怖心が払拭されていきます。
2万5千人収容できる巨大な大国技館が建設された旧旭区関目を始め、浸水が続いていた淀川沿いの低湿地への投資も本格化。安心して住めるようになったことで人口も急増し、これが後世の大阪の繁栄に繋がります。御堂筋や地下鉄は有名ですが、大大阪を造った真の立役者は、実は淀川改修事業だったのです。

市民が街づくりを行った大大阪

大大阪とは、一般に大正14年の第二次市域拡張により、大阪市が東京市を抜き人口で日本一(2百11万人)となった時期をいいます。東京市も昭和7年に市域を拡張



城北運河沿いの区画整理図

いいです。

寺西の最大の功績は区画整理にあります。河沿いの城北・榎並ノ庄・葦ノ庄と大宮の各区画整理、古市の耕地整理組合と5つの組合すべての組合長を兼ねていました。こうなるとは城北運河も実質的に寺西が造ったといっても過言とは言えないかもしれません。

区画整理事業と市電の誘致

旭区の城北公園通にはかつて大阪市電都島守口線が通っていました。この道路は市が都市計画道路として買取したのではなく、寺西率いる区画整理組合が市電誘致のため、区画整理の中に設けたものでした。

市電都島守口線は都島本通りから北進し、城北土地区画整理の赤川町で右折して守口まで通っていました。しかし、当時、市電が通っていない区もあったのに、なぜ市外の守口まで通したのでしょうか。不思議です。実は市域のぎりぎり端まで線路を

し、すぐに再逆転します。しかし、その後も大阪市の勢いは、暫くは関東大震災の影響が残っていた東京市に勝っていたようです。大阪大国技館開館の昭和12年も大大阪の時代と言っ

て差しつかえないと思われま

しかし、市域が拡張され、人口が増加しただけでは、真の意味で大大阪とはいえません。大都市として相応しい基盤整備が必要不可欠でした。ここで大大阪の繁栄を造ったもう一人の立役者として登場するのが、当時、市内各地で盛んに進められた大規模な土地区画整理事業でした。

戦前の大阪市の区画整理は大阪駅前事業を除き、全て組合施行でした。つまり大阪駅前事業以外は税金が投じられることなく、すべて地主等関係者の負担だけで施行されたわけです。

しかも大正末から昭和の初期の大阪市の区画整理は組合数で75組合。4千85haもの総面積があり、規模で他府県を断トツで引き離していました。大大阪の時代とは、まさに市民自らの手で街づくりが行われた時代でもあったのです。

区画整理が果たす使命

近代都市の必須要件は、交通と防災、

引いてもらうため、寺西ら近隣の区画整理組合が守口の広大な車庫敷地を市に寄付したのです。これでは市も、いやでも路線を延伸せざるをえません。市電の開通により、市北部の開発は大いに進みました。

赤川町の国技館計画と市電

先ほど「赤川町で右折」と言いましたが、実はこれも国技館に縁がある場所です。寺西が組合長の城北土地区画整理区域内にある赤川町9丁目(後に3丁目)に名称変更)の停留所横の敷地には、かつて関目より前に国技館建設計画があり、昭和7年には地鎮祭まで行われていたからです。

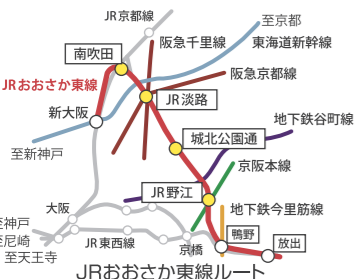
関目の国技館は、駅から遠いこともあって短命でした。仮に赤川町に建設されていたら、国技館の運命も変わっていたかもしれません。

幻の大阪国技館前駅?

ちなみに、この停留所近くで市電都島守口線は、城東貨物線と交差していました。この場所にピンときた方は相当の鉄道マニア。JR城東貨物線は平成31年春に放出から新大阪まで直結する「おおさか東線」として延



赤川町三丁目停留所付近図



JRおおさか東線ルート

そして衛生と言われていますが、これらすべてをまとめて解決できる画期的な手段が区画整理でした。

車社会となった近代、直線的に舗装された幹線道路は交通面で不可欠な存在でした。整然と整備された街並みは現代に伝えられています。

また、大阪の低湿地には利水や運搬のため掘られた井路川と呼ばれる水路が無数に存在しました。この溢れ易く防災上危険な水路は区画整理により流路がまとめられ、新たな河川が開削されました。

城北運河も大部分が区画整理区域内に計画されたので格段に早く用地買収ができ、完成したのです。

最後に衛生面で欠かせないのが下水道です。洪水多発地帯では、下水は防疫上殊に重要でした。道路の下に埋設されるため、区画整理の街路との一体施工により、迅速かつ安価に整備することができました。

注目したいのが「大阪大国技館開館記念写真帳」です。ここにはわざわざ開業しようとしているからです。実は、寺西が赤川町への国技館の誘致に動いた昭和6年は、ちょうど吹田操車場から平野駅間の城東貨物線が全線開通した年でした。当時から地元では貨物専用線の旅客線化と駅の誘致運動が何度も繰り返され、

後には城東貨物線客車運行促進期成同盟会も組織されています。或いは寺西は、貨物線開業のタイミングに合せ、隣接地に大量の旅客需要が発生する国技館を計画することで旅客線化を促し、赤川町に新駅を誘致しようとしたのかもしれませんが、もしそうなら赤川町での国技館建設を断念した昭和7年から87年。遙かな歳月を越えて寺西の構想?が、同じ場所で実現するわけです。げに凄まじきは、先人の構想力と先見性だと改めて感じさせられます。

【図・写真提供】「明治18年 淀川大水害浸水エリア」淀川資料館 「弥生時代の大阪地形図」大阪文化財研究所 「大阪大国技館内水洗トイレ写真」大阪府立大学21世紀科学研究機構 教授 橋爪紳也&橋爪紳也コレクション